

Title: 「股旅-gdeh special-」



山市 真佑
1985年栃木県生まれ。祖父母に多大な影響を受けながら育つ。滝の原健児の気持を今でも忘れていない。日本写真芸術専門学校助手を経て、現在大学院生兼フリー。

● 最近のエントリー

- 手を振る影を視界の向こうに (2007.02.28)
- 恋愛小説 (2007.02.17)
- 季節を忘れる (2007.02.11)

● アーカイブ

- Oktober 2012
- März 2011
- September 2010
- August 2010
- März 2010
- Februar 2010
- März 2009
- Februar 2009
- November 2008
- Oktober 2008
- September 2008
- Juli 2008
- Juni 2008
- April 2008
- Januar 2008
- Dezember 2007
- November 2007
- Juli 2007
- Mai 2007
- April 2007
- März 2007
- Februar 2007
- Januar 2007
- Dezember 2006
- November 2006
- Oktober 2006
- September 2006
- August 2006
- Juli 2006
- Juni 2006
- Mai 2006
- April 2006
- März 2006

● 投稿カレンダー

● カテゴリー一覧

- countries report

● ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

RSS 2.0

股旅-gdeh_special- > Februar 2007 アーカイブ

07.02.28

手を振る影を視界の向こうに

[Tweet](#)

[Check](#)

いつもより遅く起きたわけじゃないのに、遅く起きたような気がしたのは、もう誰もいなかったからというのもあるけれど、それより、その前日に一睡もしていなかったというのと、ここ数日比較的朝が早かった日が続いていたというのがあった。

目が覚めたら、もう目の前が居間だ。もうすずまは開いていた。祖父の姿もない。寝返りをうって振り返ると、祖母の仏壇に明かりが灯っていた。

数分して、意識が覚醒していくにつれて、時計に視線が行く。ぼやけた時計はそろそろ九時。たしか、九時半から引越しの見積もり。

起き出して、布団をたたみ、寝間着を脱いで、洗濯かごに投げ込み、寝巻を直して、服を着、コップ一杯の水を飲んで、あれこれと、祖父と二人で荷物の場所を確認したり、積んでみたり。

なんだか、穏やかな午前中。

引越しの業者の方が帰って、「やっぱり引越しは赤帽かヤマトだなあ」と思案。サービスでいったらヤマトか。

昼食を祖父と二人で食べている時に、ふと、「ああ、そうか。僕がいなかったらじっちゃんはいつも独りでご飯を食べるんだ」と思った。

もう何度目かわからないけれど、そう思うと、引越すことにためらいが浮かぶのだけれど、引越そうが引越すまいが、昼食を一緒に食べられない日ばかりだということは変わらなくて、

それにこの通勤時間の長さはやっぱり、精神的にも身体的にも良くないということは明らかで、引越すんだよなあ、と、今更、箸のすすみが悪くなった。

祖父はレンジの使い方を知らない。

だから、副菜の大半は冷たい。

僕がいる日は、レンジが動く。

だから、副菜はみんな暖かい。

時代劇を見ながら、冷たい副菜でご飯を食べる祖父の姿を想像したら、すごく寂しくなった。

そんな思いのまま、支度をして、家を出る。今日は駅まで徒歩だ。

家を出て、一つ目の角を右に曲がると、少し行った所でうちの畑が見える。もうすぐ「うちの」じゃなくなってしまう畑の向こうで、祖父がこちらをみているように見えた。

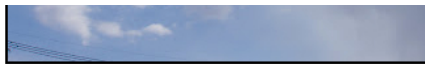
裸眼で、ほとんど見えなかったけれど、とりあえず手を振ってみた。

そうしたら祖父が振り返ってくれた。

それがすごく嬉しくて、なんだか泣きそうになった。







<http://naonaichinao.blogspot.com/>

カテゴリ:

post by 山市 直佑 | 日時: 2007.02.28 | [パーマリンク](#) | [コメント \(0\)](#)

股旅-gdeh_special- > Februar 2007 アーカイブ

07.02.17

恋愛小説

[Tweet](#)

[Check](#)





電車酔いするようになったのは
睡眠不足と食生活のせい
それをある程度改善してからは
少し
よくなりました。

それから
また電車の中でも本を読めるようになりました。

最近読んだのは
「タマリンドの木」です。

珍しく恋愛小説なんて
読んでしまいました。

その小説の舞台は
タイとカンボジアの国境の町で
半年間の旅に出る前と
帰ってきた後では
小説の印象も
ガラリと変わってしまいました。

でも
あんな風に
おも
人を恋えるって
すごく素敵だなんて
思いました。

そんな風に
人を想えるようになったら

そんなことを
帰りの電車の人混みの中で
淡々と考えたりしています。

もう春はそこまで。

まだ先のことだなんて
思えません。

07.02.11

季節を忘れる

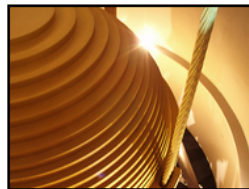
[Tweet](#)

[Check](#)

摂氏15℃と摂氏21℃の間を一往復。FWでの作品の再撮(気分的には加温だった)に台湾へ行ってきた。成田空港も祖母が逝去した時以来だからもう八ヶ月以上来ていなかった。意味もなく感慨深く感じたりもした。



台北は一年前とたいして変わってなかった。工事現場に建物が骨格を現したり、新幹線が走ったり。その程度の変化は、当たり前だけれど、景色にも空気にも影響なくて、それが余計に一年前に掘れなくてあれこれ模索してたことが頭にへばりついて離れなかった。でもさすがに二回目。今回は爽りあったり、と思いたい。(なまや困る笑)





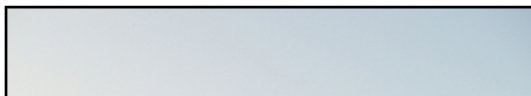
台北の気温は上着を脱いでちょっと暑いくらい。歩くとも一張羅でちょうどいい。けれどここも北半球だけあって、冬らしい格好の周りの人々。都内の服装と台北の服装はほとんど同じで、みんな厚手のコートやダウンを着ていた。薄手のシャツの袖をたくしあげていたのは街の中で僕くらいだった。11月正月の直前、街はなんだか浮足だっているよう。僕の中で、回帰線を越えた地域は雨季と乾期しかなくて寒くはない、というイメージなのだけど、ここは冬だった。季節というのは、その土地の時期時代の習慣とか行事が気温とともに踏襲されていくものだと思う。そうであれば台湾だって日本でさえ季節は脈々と人の中に息づいている。その季節を半年も忘れていたのは異邦人だった僕の方であって、レンズの向こう側ではなかったのかもしれない。生活が都市にのまれようとも、都市をのみこもうとも、季節はその土地の人たちの中にちゃんと生きている。そんなことを、台湾に再び戻って、やっと思い知った。そしてその途端に嬉しくなった。ただ、長袖の写真が今までの写真の中に溶け込んでいけるかが不安にもなったのは事実だけれど。





わざと道に迷って、鼻歌を歌って、写真を撮って、自分の居場所を見失って、また知ってる道に出て、水ががぶ飲みして、タバコを吸って、写真を撮って、道に迷う。その連鎖が懐かしかった。ああ、半年前までそんなことを繰り返していたな、と。そして余程組み立てた撮影でない限り、またそれを繰り返してくんだな、と。今度は寒い地域の撮影を、そんな風してみたいな。

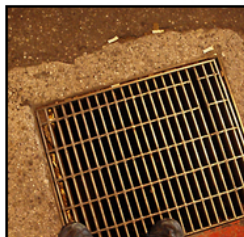
早く新しい企画に頭をヒットされたい！

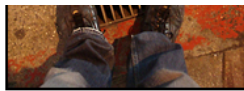
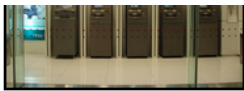




そして、予定を消化して、日本に帰ってくるのは当たり前なのだけれど、飛行機も成田空港も非日常の感じがなさすぎて、加えて台湾でも日本語が溢れていたせいかもしれないけれど、帰路が当たり前な日常っぽくて逆に違和感を感じた。けれど、そうやって日常に戻るのとは、とてもいいことなんだろう。そしてたぶん、だからまた同じように、ずっと遠いところを見に行けるんだと思う。

そしてその場所でもその場所の季節を感じていたい。





(帰路にて：上野～東大宮間)
[続きを読む「季節を忘れる」](#)

